

東の風、雨

東の風、雨

真珠湾スパイの回想 吉川猛夫 講談社

真珠湾スパイの回想

東の風、雨

昭和38年12月8日 第1刷発行 定価 290円

著 者 吉 川 猛 夫

発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 本 文 ・ KK常磐印刷所

表 紙 ・ 吉田紙器印刷KK

製 本 所 有限会社 加藤製本工場

発 行 所

株 式 講 談 社
会 社

東京都文京区音羽町3-19

電話・東京(942)1111

振替口座東京3930

©1963 検印廃止

まえがき

「東の風、雨」は、太平洋戦争の開始に当って、日本政府が在外公館むけに放送した隠語である。日本は米国と交戦状態に入れり、という意味であった。

ホノルル総領事館がこの隠語放送を聴いた時には、既に真珠湾には爆弾の雨が降っていた。私は當時真珠湾に潜入していた諜者であった。

この物語は、ハワイでの十ヵ月間の諜報活動を中心に戦前戦後の体験をありのままに記録して、日本が戦争に踏み切るまでの動揺の時期から敗戦後の混乱時期を経て漸く平静をとりもどした現在に至るまでの約二十年間を「私」という一個人の殻の中から眺めた物語である。思い違いも考え違いもあるであろうが、私はそのように考え、そのように行動したのである。

當時は、軍だけが独走して戦争に突入したのではなく、戦争を防止するに足る権威と民意が稀薄であつて、皆が知らず知らずのうちに狂熱的に戦争への道を歩んでいった時代であつた。ごく少数の人を除いてほとんどすべての国民は、好むと好まざるにかかわらず戦線に、銃後に、各方面に戦争努力を傾けた。そうするより他に途はないようにみんなが考えた時代でもあつた。私もその中の戦争協力者の一人として特異な体験をした男である。だが初めから戦争と分つていて、そのような任務についていたのでもなく、自ら求めてスパイになつたのでもないが、日本の進路の方向へ押し流されてい

つたのである。

スパイになつた動機はなにか、とよく他人から尋ねられるが、私自身にもよく分らない。そこで余

談とは思ったが、生い立ちの記から海軍時代に亘る私事を書いて、スパイになるまでの私の道程、あるいは必然性を解明しようと努力したのである。

また、国家機密を暴露して怪しからぬ奴、こういうことについては、戦勝国のアメリカは黙って一言もしゃべらないではないか、と、お叱りを受けたこともある。本書が刊行されるとさまざまな非難も浴びることであるが、戦争を抛棄した日本は過去の機密など総懺悔して反省の資とすることが必要だとさえ私は思っている。

戦後十八年、すべての状態は戦前よりよくなっているが、今もなお、いやされない戦争の傷痕は、人おのおのに反省、悔恨、憎悪、悲愁といったさまざまな形で生きている。私もそのような渦中に立って人間的苦悩を噛みしめている一人である。

なお、書中の電文は、米側の傍受解読文を更に翻訳したもので、二、三脱字などあり、不明の箇所もあったが文意は達せられていると思う。ともかく心血を注いで打った電文であるだけに記憶に残っていた。これが日本に現存する唯一の資料である。

最後に、刊行にあたって御尽力下さった講談社の小松道男氏、資料を提供して下さい富永、古森、サーナー、マーフィ夫人の諸氏に厚く感謝の意を表します。

昭和三十八年十一月六日

東京の仮寓にて

著者

目次

まえがき	一
迷いこんだ手紙	七
古光庵	
兵士の手紙	
生い立ちの記	
海軍	
故山	
太平洋波高し	二五
軍令部	
青春	
アメリカの事情	
準備	
新田丸	
真珠湾—私の運命の日	四〇
着任	
ハワイの概観	

抑

留

.....

10%

島巡り

電報

戦争決意

ハワイの気象

空軍、陸軍

密使

十一月の活動

オット・キューン

十二月の活動

最後の電報

真珠湾最後の日

軟禁生活

特殊潜航艇

リメンバー・パールハーバー

トライアングル・Tランチ

彫刻

カウボーイ・タバコ

三角牧場を去るの日

岐路

航海

国破る

.....

一六

帰国

影を慕いて

捕虜尋問

山本長官の戦死と暗号

開戦前の日本暗号

臣去る

戦後編

.....

一七

逃亡

家郷

戦史

C B S

撮影行

ホノルル漫歩

帰山

表紙 燃えあがる真珠湾の米戦艦
装幀……………田村宗美
本文図版カット……………加藤新

迷いこんだ手紙

古 光 庵

けさも古光庵で目が醒めた。胡桃の木の影が障子に映っている処からみると、十時は廻ったかな、と思った。「きょうは、天氣がいらしいぞ。よし一丁やるか」と、飛び起きた。ここ二、三日雨降りて稽古休みしていたので腕が鳴る。

私の稽古というのは、手裏剣だ。流儀は、野球のピッチャーがボールを投げるように、全力を出して手裏剣を打つのだ。的は、幅一間高さ九尺に厚板を敷き並べて立てかけ、上に蓆を張って、中央に径一尺の同心円の標的を画がいた所に向って、十歩、十五歩の距離から打つのだ。その威力は古畳二枚は刺し通すので、優に人を倒せる。剣は太火箸程の太さで両端が鋭利に尖らせてある。距離によっていずれかの先端が命中する仕組だ。左手に

十本を持って、一本ずつ全力をあげて思う所に打つ修練だ。犬猫なら完全に倒せると思うがまだ試みたことがない。

なぜ私が手裏剣に興味を持ったかという、すべて技術が必要とするスポーツの上手下手は瞬間の手の内きまる。例えば、ボールかストライクかの区別は球がピッチャーの指先を離れる時にきまるとされているし、ゴルフボールがホールインワンするかしないかは、ウッドが球に当たる瞬間の当り方、速度によって既にきめられている。そしてスポーツマンは、その瞬間の時間のために長い修練を積み重ねる。ここが私の氣に入った所だ。特に手裏剣は、この瞬間のために、きめなければならぬ要素を多分に含んでいて、しかも原始的である。

庭一面に拡がった杉苔が、しっとり水氣を含んで緑が冴えている。赤味がかった楓の新芽、銀色に光る萩の芽。私は片手に十本の剣を鷲掴みにして 庭石伝いに稽古場に下りて行った。

十五歩の距離に足場をきめ的に向った。この時は心氣を沈めて無念無想だ。

剣を一本右手に取って、構えた。さっと投げる。剣はストン、と板の響きを残して 的の中央部に突き刺さっ

た。当りといい、勢といい申し分ない。第一発に氣をよ

くして二発、三発……矢継ぎ早に放った劍は、命中して見事に的に林立した。

「けさは調子がいいぞ」

内心、腕の上達を喜んだ。

手裏劍はその日の精神状態に左右される。いつもはこの距離だと八〇パーセントの命中率だ。距離を延ばす程命中率は低くなる。劍は飛びながら回転しているので、劍の腹が当たった時は、ボテッと嫌な音をたてて落ちることもあり、衝撃角度が浅いと的中しても威力がなく不格好にブラ下る。

たわいない遊びといえど全く中学生趣味だ。女房は、「お父ちゃんはお供みたいなのをして……危いからおやめなさい」

と、まゆをひそめるが、私は大真面目である。劍を鍛造して研ぎ磨き、数十本を秘蔵している。中学三年の息子は、親父に協力して共に稽古に励む。

「親子が、馬鹿なことに熱中してみっともないわ……。おやめなさい」

と、息子は叱られるが親父が味方なので一向に平気である。女房も最近はおきらめたらしく叱言を言わなくな

った。

手裏劍は当たるも当たらぬも、將に劍が手を離れる時の手の内にある。と前にもいったが、一度、手から離れたらどうしようもない。いかに命中を念じても及ばない。この手の内の微妙な働きは、理論で説明できないし教えることもできない。距離の算定、速度、回転運動、方向等のファンクションが揃って一点に凝集した時にはじめて命中が成立する。この計算は電子計算機でもむつかしいだろう。ところが人間の靈性は、瞬時に計算を終って、一〇〇パーセントの命中に近づく可能性をもっている。私は、手裏劍をとおして、この靈性を発掘しているのだ。

撃っては抜き取り、抜いては投げる。これを数回繰り返すうちに全身汗ばんでくると漸く佳境に入る。

そんな初春のある日だった。

「お父ちゃん、お手紙よ」

いつの間に来たのか、室内から声がした。

「どこからだ」

私は的をにらんだまま聞きかえた。

「だれだかわからないけど、アメリカかららしいわ」

手に余った剣を投げ終ろうとしたが、気が散ったせいか、どれも命中しない。

脱いだ片肌を入れて、庵内に入り、熱い茶を啜った。

「ファンレターか」

「そうらしいわ……ぎっしり書いてあるのでなんだか分からないわ」

「おれも外国からファンレターが来るんだから大したものだろ。ははは……」

「つまらない事で有名になるのは迷惑よ……この間もガソリン入れにきたお客さんが、奥さん、あんたは、ハワイの二世じゃというがそうかね。大将とアチラで一緒になったんかね。だって」

「いいじゃないか、お前のお面が日本人ばなれしてて」「よくはないわよ。あなたがつまらないことお書きになるからよ」

たしかに女房の顔は日本人ばなれしていて、息子が生れて間もなく頭全体おできに悩んだ結果、小学校を終える頃まで髪の毛が茶色であったから、てっきり女房は混血児に違いないと思われていた。一度流布された噂は取り消しにくいもので、家族連れで出かけると、目引き

袖ひきとやかく取沙汰された。近所の人は女房も私も純国産であることを知っていてくれるが、遠方から来る人は、私がハワイにいた話と女房の顔がエキゾチックであることを組み合せて、そんな風に独り合点している人も多くあった。

「読んでごらんない」

と、女房は、眺めていたが読めそうにもないので諦めたか、机の上に開封した手紙を残したまま立ち去った。

兵士の手紙

その手紙の差出人は未知のアメリカ人であった。小形封筒には宛名が、たどたどしく書かれて薄汚れていた。あちこち転送されながら遂に辿り着いたという感じだ。五枚の便箋に表裏ぎっしり書きこまれていた。別紙には二人の兵士の肖像がペンで書かれていて、緑色のバックまで彩色されている。その中の一人が、この手紙の送り主である。

真珠湾攻撃当日の一断面がよく分るので、全文を忠実に訳してみる。

拝啓

この手紙は、第二次大戦中のできごとの一つであります。一九四一年の夏、私は、ハワイ、ヒッカム飛行場の空軍部隊員として、親友の、テキサス出身のホーナー君達と一緒に、ジョンロジャース飛行場で飛行訓練をやっていました。

その時、私は、飛行場の喫茶室で、あなたに会ったことがあったと思います。私は、友人と十五分間の飛行訓練を終えて、その喫茶室に入った所が、一人の日本人（きつと、あなただったと、今でも思っています）が、ランチを食べながらカウンターの東隅に坐っていたと思います。

私は彼（あなた）と軽飛行機や飛行の事について話があった。たしか、その男はライカによく似た三五ミリのカメラを、皮ケースに入れて肩にかけていた。われわれが食事をすませると、その男は、食堂の外で、写真を撮ってくれた。

あなたは、こんな些細なできごとを記憶していますか。

私の友人というのは、背の高いテキサスッポで、頑丈な四角の顔で、大きな手を持った奴でした。子供っぽ

くて、明朗な男でしたが、バプティスト信者で、いつも聖書を持ち歩いておりました。その日、ホーナー軍曹はなにかの都合で不在であったので、私は、もう一人のカーペンター教官機に同乗して、ドールのパイナッブル工場の上空で、錐揉み飛行の訓練を終えたところでした。

一九六〇年十二月七日、私は、ホノルル、スターバレーティン紙の元編集員リレ氏から新聞切抜きを送って貰いました。その記事には、

（一九四一年十二月七日の真珠湾空襲における、副領事森村正のスパイ事件）

という見出しがありました。

それを読んで私は、あなたを思い出したのです。私はたしか、二度三度、飛行場であなたに会ったと思います。

私はいま四十二歳です。ホーナー軍曹は空襲の翌八日、クイン病院で死にました。空襲の日に、ヒッカムの第十一、第十三格納庫の間で爆撃に遇い、手足をもぎとられたのです。私は、幸に怪我はなかったのですが、八時頃兵舎の西北にある兵員食堂が、目の前で吹きとばされる目にありました。

真珠湾奇襲について、あなたのやった役割に、私はいま、怨み言をいうつもりはありません。しかし当時（今でも）平服の者が、立入禁止区域に入って、地上、空中から写真撮影をして歩き、且つ地方紙、その他から必要な情報を集める事は許されるべき事だろうか。まして、あなたは、日本人でありながら飛行場まで来て詳細な写真をとるなんて、実に怪しからん事だと思います。

しかし結局、われわれが、ばかだったんです。士官も兵隊も皆が、どうかしていたんです。あの朝、私は、真珠湾口から侵入して来る零戦を見つけて、「日本軍じゃないか」と叫び、その飛行機が士官クラブの上空を飛んで、翼の日の丸を指さした時でさえ、皆は、知らん顔していました。

吉川さんに、ミスタースパイの名を献上する。あなたは、よい仕事をした。

空襲中、私は、大佐に命ぜられて、パンガロー前の司令部標識の取り除けを命ぜられて、爆弾が炸裂している間、泥まみれになって這い廻った事を想像して下さる。時に、私は二十三歳で、ホーナー軍曹も同年であった。ホーナーは、第十一格納庫の前でB一八爆撃機

のタイヤ取り替え作業中にやられたのです。われわれは、中型爆撃機第十八爆撃隊の第十一爆撃中隊の司令中隊員であつたのです。

一九四一年の夏の間は、戦争警戒中でありましたが、十二月には、士官たちも、戦争はない。と安心しておりました。

今、私は、ソ連、米政府、米海軍、並にエリザベス女王を説得しようと頭を悩ましております。

もし、アメリカがモスコウと妥協するならば、必ず、もう一度々真珠湾々が起るであろう。そして、それは世界戦争を意味する。私たちは、共產主義と妥協することはできない。又、軍備全廃、核実験禁止など、これらの要求に屈服することによって、平和を維持することはできない。と思っております。

八時五分、ヒッカムの新兵舎の北側の兵舎の中に、中尉と軍曹と兵士と私は、待避していたその時、零戦一機が、われわれに機銃掃射を浴せた。射角が充分でなかったので、誰にも当たらず飛び去ったが、操縦者は、われわれを見つめて、彼の鼻に親指をくっつけた。ので私たちも、同じ仕草をして応えた（挑戦、軽蔑の意味）。弾丸は三尺程外れて、珊瑚礁の土煙をあげた。

八時三十分。ヒッカムの官舎の婦女子の撤退作業に従事しました。

九時三十分頃には、おびただしい死傷者がでたので、ホノルルやフォートシャフターへ運び出さねばならぬので、さしもの広い飛行場も混乱したから、私はトラックの交通整理にあたったのです。

吉川さん！ あなたは、この作戦に、面目を施すにたるその人である、私はいつも思っています。

しかし、私は、一九四一年をふりかえるたびに、あなたも、アメリカ海軍も、子供のスパイ遊びや兵隊ごっこをやっていたにすぎないと思われます。

なぜならば、我が軍は、戦争の可能性を信じないし、あなたはあなたで、カメラなどぶらさげて陽気に遊びながらスパイしていたのだから。

あなたは、真珠湾でダーティブレイ（卑怯な仕打）をやった。

しかし、それは完全にわれわれの失敗であつた。

前に書いた親友ジェイムス・ホーナー軍曹は、クイン病院で、こういいました。

「チャールス。俺は、もうきみに会えないよ。神様は、これがお前の時だ。とおっしゃるから……」

それ以後、私達は二度と会えなかったのです。その昔、あなたは、あなたの仕事をりっぱになしとげた。私も、できるかぎりの事やって、勲章ももらった。今や、日米は、自由世界の建設のために、あらゆる可能性をなしとげて、人類の恒久平和に尽すべきだと信じます。

敬具

米国ミゾーリ州セントジョセフ六番街

チャールス・メーソン

長い手紙を読み終って、私は、古傷に触れられたような気がした。手紙の主は、現在四十二歳である。四十代といえば、中堅アメリカ市民を代表する世代である。そして、その世代の人々の世界観、人間観を率直に披瀝したものと思われた。文面から察するに、この人は高い教養を身につけた人でもないらしく、平凡な一市井の人であらう。文中、独り合点して、あの時の男は、私にちがいないときめてかかっているのもお笑い草だし、いくら当時でも、カメラなどぶら下げて陽気に遊ぶスパイなどは、いなかったであらう。しかし、彼のいわんとする所は、理解できた。

私は、これまでに、人にすすめられるままに若干の手記をものしたし、また求められるままにテレビやラジオにもでたが、自分のスパイ行為を誇らしげに語る気持にはなれなかった。ありのままを伝えて、歴史の一環を背負った者の責を果そうとしたにすぎなかった。

スパイというアンフェアな行為によって惹き起された殺戮、破壊、そして祖国を救うべくして滅亡せしめた行為を反省するとき人間の苦悩を味わうのは当然である。被命者といえどもその責は免れないと自戒している。そして、いつか機会があれば、真珠湾の戦死者に、人類に謝罪せねばならないと思っていた。

私は真正正銘、真珠湾をスパイした男、森村正だった。日本が戦争を決意する二年前からハワイ潜入を準備して昭十六年三月末にはホノルル総領事館員になりすまし、十二月八日真珠湾に爆弾が落ちるその日、連日連夜アメリカ艦隊の動静を東京に電報して奇襲部隊を誘導しつづけた。蔭の男々であった。当時私は三十歳の退役海軍士官であったが、なぜこの運命を、私が背負わねばならなかったのか。この大任に立ち向った私が、どのように働き、そして苦悩しなければならなかったかを回想してみたいと思うようになったのもあの運命

の日から二十数年たった歳月のせいだろうか。

生い立ちの記

ひとの出生は、気になるものである。殊に外国では、出生地は、国籍取得にも関連するであろうし、また性格形成にも影響するだろうから、パスポート、履歴書、身の上書のたぐいには、必ず、出生地を銘記するようになっている。私共も、外国人と話す場合には、

「きみは、どこに生れたか」「その場所は、農村か町か。山に近い所か。それとも海に近い所か」

などとたまたみかけての質問を受けることがある。たまたま、彼が、こちらと同じような環境の生れであると、大変に喜ぶ。しかし「山に近いか、海に近いか」という質問ぐらい私を困らすものはない。大陸に住む彼らの標準からすると、日本は、たいていの所は、海にも山にも近いのである。もっとも、山梨県とか飛騨の国とかならば、「山」だと答えられるが、私の生れた愛媛県松山市のような所は、バスで三十分もすれば海にも行かれるし、十キロも歩けば、四国山系に達することができるような所では、返答に窮する。

そこで、たいていの場合は、

「海に近い小都会だ」

と答えることにしている。そうすると、彼らは、早合点して、

「そうであろう。きみは、泳ぎもうまいそうだし、小さい時から海に憧れて海軍に入ったのだろう」

と、いうことになってしまふ。

だが、私の少年時代は、海水浴といっても、年に一度か二度、海に行く程度で、夏中、河や溜池で泳いだり山に、いたどりやぐみの実を採って遊んだ田舎の少年で、海はほとんど知らなかったのだが、海岸に育ったことにされてしまふ。

私の出生地は、松山市で、本籍地は愛媛県温泉郡重信町という農村地帯の小さな町である。ここには、祖父の代から住みついている。この祖父は、私の父を妊娠中の妻を離別して、他にできた愛人と手に手をとって、駆け落ちも同然、ここへ来た人であるが、温厚な人柄で他人の面倒もよくみたら、信望も篤く商売も順調に進んだようであった。

父は、生れるとすぐ、祖母の家に養われていたが、五歳の時、継母の下に引き取られて家業を手伝っていたが、

継母、異母弟妹との折り合いが悪く、青年期に達すると、家を出て苦学していたが、間もなく、日露戦争に兵士として従軍、東鷄冠山に負傷した。その後下級官吏の職を得て、松山に勤務していたので、その頃に生れた私の出生地が松山市になっているわけである。母は、松山市近郊の農家の娘で、父とは、年が十一も距っていて気性の激しい人であった。夫婦仲は、あまりよかったとは、子供心にも思えなかったが、それでも四人の子を育てて、一生を終った。両親とも、平凡な実直な小心者であったが、私は、父の体質と母の気質を多分に受け継いでいるように思われる。

私は、明治も末年、四十五年三月七日に生れたが、母の乳房に吸いつく本能を忘れてきた不器用者で、母乳を吸わなかったから、牛乳、重湯などの代用乳で育った。そのためか胃腸障害を起して、栄養不良児であつたらしい。そして、度々医者から匙を投げられて、所詮この子は育つまいと、両親を嘆かせていたという。

青白く痩せ衰えた幼児をかかえた父は、我が子の顔を、じつと見つめて、一つの冒険を思いついた。

「どうせ、だめな児なら、鍛練してみよう。もし、方法を誤って、死期を早めたとしても、我が児よ、以て瞑す